

B.B.S.R.への参加

写真 杉山 貞二
(Sugiyama Teiji)

生物圏科学研究科生物生産学専攻
博士課程前期一年
(水圏環境学研究室)

大西洋に浮かぶバミューダ諸島へ

皆さんはバミューダ諸島をご存じでしょうか。バミューダというと、バミューダトライアングルを連想する人が多いでしょう。バミューダ諸島は、ニューヨークから南西約千五百キロ、大西洋西部に浮かぶ人口約六万人の小さな島です。北緯は約三二度で、日本で言えばちょうど宮崎市と同じです。

私は一九九六年七月十四日から八月三日までの三週間、Bermuda Biological Station for Research (B.B.S.R.)で毎年行われている、大学学部生・院生を対象としたサマー「Biological Oceanography(生物海洋学)」で、海洋環境学を専攻している私にとっては興味深い名前でした。

昨年度と同じコースに、私と同じ研究室の先輩三人が参加しており、とてもすばらしかったとの感想を聞いていたので、参加を決心しました。また、海外旅行の経験のなかった私にとって、観光地であるバミューダ島での生活は魅力的であり、外国人に囲まれて生活することに、苦手だった英語の勉強にもなると思いました。

B.B.S.R.のサマーコース

B.B.S.R.もさまざまな国の学生を募集しており、昨年度の参加例のある私の研究室

にも参加の話が来ました。数回の手紙のやり取りの後、私の参加が決まり、奨学金もB.B.S.R.から授業料十生活費の七五%を援助していただくことになりました。

B.B.S.R.とは、バミューダの日本で言う水産研究所です。研究例としては、大西洋での数十年間の観測、亜熱帯の海洋生物のさまざまな研究、また地球温暖化の原因物質の一つである二酸化炭素の研究もしています。

そこでは研究のほかに、毎年さまざまなコースを開き、いろいろな国の学生に学習する機会を与えています。私の参加したBiological Oceanographyのほかにも、主に魚を研究するコースや、珊瑚礁の生態系を研究するコースなどがあります。

コースの内容は、初めの二週間は午前中が講義、午後からは実験で、大学の授業と同じような形式でした。その間に、小船で近くの海まで行きダイビングをしたり、「Weather Bird II」という大きな調査船で、外洋へサンプリングに行ったりしました。そして最後の二週間は、コースに参加した一人一人が、それぞれ研究テーマを決め自分で研究し、最終日に発表するというものでした。また、講義内容についての試験もありました。初めの二週間は講師の話す言葉が聞き取れませんが、「そのうち分かるようになるさ」といった安易な気持ちでいました。それよりも泳ぎに行ったり飲みに行ったりする

1996 Biological Oceanography
メンバーと講師
(本人は向かって右端)



ことに夢中でした。しかし、二週目に入っても依然として言葉は聞き取れず「やばい」と思い始めました。

そこで講師に相談し、薦められた専門書を読んだり、講義後に個人授業をしてもらったりしていました。最後の二週間はサンプリングや分析などで忙しく、自由な時間はあまりありませんでした。心配だった英語でのプレゼンテーションもうまくでき、試験も無事通過しました。

コースに参加したメンバーは、幸か不幸か私以外は全て女性でした。アメリカ人が五人、カナダ人が一人、アルゼンチン人が二人、オーストリア人が一人、そして日本人は私一人でした。

英語を母国語とするアメリカ人とカナダ人の英語は、速くあまり聞き取れませんでした。英語が母国語でない不得意な人たちはよく話しをし、休日などは一緒に行動していました。三週間一緒に行動していると、いろいろな文化の違い、発想の違いを感じまし

た。日本人同士なら言葉にしくなくても意思が通じる場合でも、外国人同士の場合は、はっきり言葉にしないと相手にされないということを感じました。そのほかにも私にとっては驚くことがたくさんありました。

グッドなコミュニケーション

バミューダでの三週間で、私は多くのことを学びました。中でも最も印象的だったのは、先程述べた外国人とのコミュニケーションでした。今回の留学により、多くの外国人と友達になり、今でも彼女たちとのメールのやり取りは私の楽しみの一つです。そして、苦手意識の強かった英語についても、英語が上手でなくとも何とかやっつけていける、という自信ができました。

もし、私の友達や先輩で、バミューダのコースに参加してみたいという人がいれば、私は強く勧めます。そこには言葉で言い表せないほどの美しい海と、すばらしい仲間たちがいるからです。